

グリムのメルヒェンにおける女性像

野 口 芳 子

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

Das Frauenbild im Märchen der Brüder Grimm

Yoshiko Noguchi

*Philosophische Fakultät, Anglistische Abteilung,
Mukogawa Frauen-Universität, Nishinomiya 663, Japan.*

Die meisten Heldinnen in den Märchen der Brüder Grimm sind sehr häuslich und tüchtig. Aschenputtel, Schneewittchen und die Stieftochter der Frau Holle verrichten z.B. ihre harte Hausarbeit sehr fleißig, schweigsam und ohne zu murren. Fleiß, Tüchtigkeit und Schweigsamkeit sind hervorstechende Eigenschaften der Heldinnen.

Schwatzhafte Frauen treten dagegen im Märchen kaum als Heldinnen auf (KHM 3, 9, 21). Neben der Redseligkeit ist auch der Hochmut unbeliebt. Wenn eine Heldin die Freier, die die Eltern ihr vorstellen, nicht akzeptiert, und einen nach dem anderen hochmütig ablehnt, wird sie bestraft (KHM 52). Wenn sie dagegen den von den Eltern empfohlenen Mann heiratet, wird sie am Ende glücklich, auch wenn der Bräutigam kein menschliches Wesen, wie z.B. ein Löwe ist (KHM 88).

Beim Froschkönig ist das nicht der Fall. Die Königstochter handelt nicht nach dem Wort des Vaters, sondern nach ihrem eigenen Gefühl. Die Auflehnung gegen die väterliche Gewalt bringt ihr hier Glück. Doch wird nicht ihr starker Wille, sondern ihre Keuschheit belohnt. Die Keuschheit wird in den Grimmschen Märchen für sehr wichtig gehalten, und ihretwegen haben die Brüder Grimm ein Märchen oft umgeschrieben. Darin spiegeln sich ihre eigene Lebensauffassung und die bürgerliche Moral der Zeit wider.

Was die Neugier betrifft, urteilt das Märchen oft ungerecht. Die Neugier der Frau wird meistens im Vergleich mit der des Mannes allzu negativ eingestuft. Wenn der Held durch Neugier ein Tabu bricht, wird ihm oft großzügig verziehen (KHM 6), während die Heldin im gleichen Fall sehr hart, sogar manchmal mit dem Tode bestraft wird (KHM 3, 43, 46). Der Grund dieser ungerechten Behandlung ist auf die christliche Moral seit dem Mittelalter zurückzuführen: die neugierige Frau sei leicht zu verführen und sie breche leicht die eheliche Treue. Die Frau lebe immer in der Erbsünde Evas. Wer zuerst der Versuchung erliege, sei nicht der Mann sondern die Frau.

Kurz gesagt, hat der Held in den Grimmschen Märchen meistens, ohne sich groß anzustrengen, Glück, wenn er nur mutig und tolerant ist, während die Heldin erst dann glücklich heiraten kann, wenn sie ihre Neugier überwindet und gehorsam, schweigsam und fleißig arbeitet. Die Frauen sind also auch im Märchen an die moralischen Lehren der Zeit gebunden, und von ihnen wird geduldige Hausarbeit und ein fügsames passives Leben gefordert.

I

グリムのメルヒェンにおける女性像について述べる前に、まずメルヒェンという言葉の概念とグリムのメルヒェンそのものの概念規定について概観しておこう。日本では「グリム童話」という訳語が一般化しているが、ドイツ語の „Märchen“ (メルヒェン) という語は、本来、童話ではなく昔話という語がこれに一番近い訳語といわれている。しかし、厳密な意味では „Märchen“ に相当する訳語は他の言語にはなく、国際メルヒェン学会などではドイツ語の „Märchen“ をそのまま使用している。ここで使用しているメルヒェンも、概念があやふやな日本語化したメルヘンではなく、ドイツ語の „Märchen“ をそのままメルヒェンと仮名書きにしたものである、ということを経験して断っておく。ところで、グリムのメルヒェンの正式な名称は「子供と家庭のメルヒェン集—グリム兄弟による収集—」であり、グリム兄弟によって創作されたものではなく、収集されたものであるということが強調されている。1812年に初版の第一巻、1815年に第二巻が出され、以後1819年に第二版、1837年に第三版、1840年に第四版、1843年に第五版、1850年に第六版、1957年に第七版(決定版)が出されるまで、実に七回もグリム兄弟はメルヒェン集に手を入れて改訂版を出している。1810年の手書き原稿(初稿)と1857年の決定版を比較すると、収集したものであるはずのメルヒェンが、グリム兄弟によっていかに大胆に書き換えられているかがよくわかる。収集したメルヒェンを基にして、彼等は直接話法を多く取り入れたり、外来語(主としてフランス語)を排除してドイツ語に置き換えたり、原始民族の古代の信仰を挿入したり、異形と異形とを繋ぎ合わせたりしながら、手を加えていき、本来はもっと不揃いのものであるべきメルヒェンに、統一した文体を与え、民族調とでもいうような簡潔でリズムカルな文体に作り変えている。従って、グリムのメルヒェンとは、個人の自由な想像力によって生み出された創作童話(Kunstmärchen)ではないが、本来、口承で伝えられてきた民族メルヒェン(Volksmärchen)とも異なるものであり、敢えていえば、読むメルヒェン(Lesemärchen)、本による民族メルヒェン(Buchmärchen)という新しいジャンルを切り開いたものと規定することができる。¹⁾ しかし、このグリムのメルヒェンがあまりにも普及したので、グリム以降、メルヒェンといえば口承のものではなく、グリムのメルヒェンが典型的な民族メルヒェンであるかのごとく評価され、取り上げられるようになっていったのである。

II

ところで今日、一般に、グリムのメルヒェンというと女性中心の話である、というイメージを抱いている人が多いようである。実際、グリムのメルヒェンの中で有名なものは、ほとんど女の子が主人公として活躍しているメルヒェンである。例えば、KHM 1「蛙の王様」²⁾、KHM 21「灰かぶり」、KHM 24「ホレばあさん」、KHM 26「赤ずきん」、KHM 50「いばら姫」、KHM 53「白雪姫」、KHM 161「雪白とバラ赤」などである。しかし、女性が主人公として登場しているメルヒェンは、数から見るとわずか61話しかなく、グリムのメルヒェン全集211話中30%程度にすぎない。数の上では三分の一以下である女主人公のメルヒェンが、どうしてこうも有名になったのか、その原因を考えてみると次の三つの点が挙げられる。まず第一の原因は、1825年に発行された小さな版(選集)の普及である。それまで出版されていた全集から50話だけを選んで編んだものだが、この50話中女性が主人公のものは30話程あり、60%にもなる。普及したのは全集よりもこの選集の方だから、有名な話は女性が主人公ものというイメージが定着したのであろう。³⁾ 第二の原因は、人気のあるメルヒェンが魔法昔話に集中しているということである。グリムのメルヒェンと一言で表現しているが、収集されたメルヒェンの内容は多種多様で、厳密な意味でのメルヒェンだけを納めたものではない。全集211話中、本格昔話と定義づけられている魔法昔話は60話程しかなく、他は、動物昔話、笑い話、伝説、聖者伝説、言葉遊び、教訓話などに分類できる。⁴⁾ 魔法昔話は数の上では三分の一にも満たないが、その中には人気のある有名なメルヒェンが数多くあり、そこでは主として女主人公のハッピーエンド型の話を中心になって語られている。第三の原因は語り手である。マリー・ハッセンプフルークを初めとして、グリムのメルヒェンの語り手は、主として、

都市上流市民出身の教養ある若い独身の女性である。⁵⁾ 彼女たちは独身の間だけメルヒェンを語り、結婚すると申し合わせたように語らなくなってしまう。メルヒェンが女主人公の人生を語り、結婚＝ハッピーエンドという形で終わっているのと合い通じるものがあり、興味深い。語り手が若い女性であるということは、主人公に自分の人生を重ね合わせて語る傾向があるので、女性の登場が多くなるのは自然の成り行きといえるだろう。以上のような三つの理由から、グリムのメルヒェンでは女主人公のメルヒェンが目立っているのである。

III

この女主人公がグリムのメルヒェンの中でどのように描かれているのか、ということを探り出していくことがこの論文の主たる狙いなのだが、その課題に取りかかる前に、グリム兄弟自身の女性観について調べておく必要があると思われる。グリム兄弟がこのメルヒェン集を初めて出版した頃、彼等は、20才台の青年で、二人ともまだ独身であった。兄のヤーコブはそのまま一生独身で通したが、弟のヴィルヘルムは1825年、40才の時、ようやく結婚した。それまで兄弟の身の回りの世話は妹のシャルロッテがしていた。だが、彼女が結婚してからは、家事をしてくれる女性が誰もいないまま、兄弟は不自由な生活を送っていた。そんな生活を三年間続けてから、ようやくヴィルヘルムの方がメルヒェンの語り手でもあったヴィルト家のドルトヒェンと結婚した。ヤーコブは独身のまま弟一家のもとに居候し、死ぬまで彼等と一緒に生活した。

1806年のコンスタンツ市の統計によると、30才～70才までの男性で独身者は23%、結婚平均年齢は34.6才、女性で独身者は32%、結婚平均年齢は30.3才となっており、⁶⁾ 社会全体が比較的晩婚であることが分かる。それにしてもヴィルヘルムの結婚は40才の時なので、平均よりも相当遅いことになる。当時は女性の三分の一、男性の四分の一は独身のまま一生を終えるが、兄のヤーコブはこの四分の一に属していたことになる。

彼等がメルヒェンを収集し始めた頃(1806年)、21才と22才の独身の青年であった彼等にとって、身近な女性といえば、母親(未亡人)、叔母(女官長で独身)、妹(未婚の少女)という、独り身の女性ばかりで、妻とか恋人とかという存在からは、彼等はまだ無縁の初な若者であった。グリムのメルヒェンに見られる独特の純潔さ、潔癖さのようなものは、禁欲的な生活を送っていた当時の彼等の、女性との生活体験の無さから来るものかも知れない。このようなグリム兄弟の女性との係わり方を念頭にいれながら、グリムのメルヒェンの中で活躍する女性の姿を観察していこう。

IV

そこで、まず、ヒロインとして登場している女性について、具体的検討を重ねていくことにする。中でも、グリム兄弟が特に愛着をもっていたといわれているメルヒェン、KHM 161「雪白とバラ赤」について見ていこう。このメルヒェンは全集の第三版(1837年)の時、初めて入れられたものである。従って、小さな版の初版(1825年)には間に合わず、収められていないが、1850年に出た第二版にはKHM 124「三人兄弟」と差し替えて入れられている。初版と再版とで入れ変わったメルヒェンは、小さな版ではこれ一つだけであるのを見ると、グリム兄弟はこの「雪白とバラ赤」が余程気に入っていたと思われる。このメルヒェンはカロリーネ・シュタール夫人の物語「恩知らずの小人」をもとに書き換えたものである、とグリム兄弟自身がその注釈書で述べている。⁷⁾ 実際これは、その極端な書き換えの手法から、口承の民族メルヒェンというよりヴィルヘルム・グリムの創作童話であるとまでいわれている。⁸⁾ ヴィルヘルム・グリムの描写がどんなものであるか、ここでそのメルヒェンの一部を引用する。「二人の子供は、世の中にこれ程の子はいないと思われるほど信心深く、気立てが良く、骨惜しみせずよく働く女の子でした。・・・二人はとても仲が良かったので、一緒に外に出る時は、いつも手を繋いでいました。」⁹⁾ 「雪白とバラ赤はお母さんの小さな家を、それはそれはきれいに掃除していましたので、中を覗いて見るのが楽しみなぐらいでした。夏はバラ赤が家の係で、毎朝お母さんが目を覚ます前に、ベッドの前に花束を置きました。その中には白と赤のバラの花が一輪ずつ入っていました。冬は雪白が火を起こ

し、お鍋を炉の上に釣るしました。お鍋は真鍮で出来ていましたが、きれいに磨き立ててあるので、金のようにピカピカ光っていました。」¹⁰⁾ここに描かれている二人の娘は、非常に礼儀正しく、よく手伝いをし、優しく、親孝行である。朝は母親より早く起きて、ベッドに花を飾ったり、火を起こしたり、鍋をピカピカに磨いたり、とてもよく働く。その上、この上もなく仲が良い。このあまりにも現実ばなれした模範的な母子関係の描写は、ヴィルヘルム・グリムによるもので、彼の理想的家庭像を描いたものであるといわれている。雪白とバラ赤の家庭は、グリム兄弟と同様、夫に先立たれた母子家庭であり、極端に仲のよい姉妹関係は、彼等自身の兄弟関係を投影したものであろう。

「夜になって、雪がちらちら降り出すと、お母さんは、『雪白や、門をさしてきておくれ』といいました。それから三人は囲炉裏のそばに座りました。するとお母さんは眼鏡を掛けて、大きな本を手にとって読んで聞かせてくれました。二人の女の子は熱心に聞きながら、糸を紡いでいました。みんなのそばには、子羊が床に寝そべっていました。後ろの止まり木には、白い小鳩が止まり、翼の中に頭を突っ込んでいました。」¹¹⁾

ゲーテが母親にメルヒェンを聞かせてもらったのとは対照的に、グリム兄弟は母親からメルヒェンを語ってもらったことは一度もない。それ故、母親が子供たちに本の読み聞かせをするこの家庭は、彼等にとって理想的なものだったのであろう。ここでは平和で優しさに満ちた牧歌的な生活が、実に細々と描かれている。しかし、一方、何をして生計を立てているのかといった現実的な面については全く触れられていない。これは19世紀のビーダーマイヤー時代の特徴を典型的に表したものと言える。すなわち、産業革命以降、家庭はもはや生産の場ではなく、消費の場としての機能のみを持つようになったので、外部から閉ざされた独自の場として独特の文化を生み出すようになる。居間や子供部屋の家具を中心とする住居文化が発達したのも、家庭を家事と育児と団樂の場として捉えたからである。¹²⁾ここでは家庭は、このメルヒェンで描かれているように、調和に満ちた内の世界であり、荒々しい労働の外の世界と対照的なものと捉えられている。

V

雪白とバラ赤に限らず、一般に、グリムのメルヒェンに登場する女の主人公は、揃って家庭的で、よく働く。赤ずきんは、10才前後の小さな女の子であるのに、ワインとケーキを入れた重い籠を持って、森の向こうのおばあさんの家まで一人で歩いて行く。この危険で大変な重労働を、ごく普通のお手伝いとして、彼女は気軽に引き受けている。灰かぶりは、朝から晩まで継母とその連れ子の姉達に扱き使われ、灰まみれになって働き回っている。「ホレばあさん」の継娘も、実の娘が怠け者で何もしないので、家の仕事を全部引き受け、灰だらけになって働き、指が血まみれになるほど糸を紡いでいる。その上、この継娘は地下の世界にまで行って、パン釜からパンを引き出したり、熟したリンゴを木から収穫したり、羽ぶとんを毎日ふるったりと、小まめに家事をこなす働き者の女の子として描かれている。この特徴は、グリム兄弟の書き換えによって、決定版では更に強調されている。例えば白雪姫は、初稿(1810年)では小人の家に住む条件として、食事の用意をするだけでよかったのが、¹³⁾初版(1812年)～決定版(1857年)では、料理、寝床の準備、洗濯、針仕事、編み物、掃除、整理整頓など家事全般をすることになっている。¹⁴⁾これらの過酷な家事労働をヒロイン達は何の不平も言わず、ひたすら黙々とこなしている。

働き者であることに加えて、この寡黙さもまた彼女たちの特徴で、¹⁵⁾ヒロインにおしゃべりな女性が登場することはまずない。灰かぶりはあれほど虐待されても父親に言いつけたりせず、専ら黙っていじめに耐えているし、KHM 9「12人の兄弟」の妹の王女は、カラスになった12人の兄達を救うため7年間一言も口をきかない。又、KHM 3「マリアの子供」の少女は、開けてはならない戸を開けたのに、そのことを素直に白状しないため、罰として天国から追放され、言葉まで奪われてしまう。このようにメルヒェンでは沈黙のヒロインがしばしば登場する。ポティクハイマーはその理由を、キリスト教社会の教えの中に求め、新約聖書の中に女の発話に対する明確な禁止令「女は教会にて黙すべし。彼等は語ることを許されず。(コリント前書・第14章・34-35)」があることを挙げている。¹⁶⁾しかし、女性のおしゃべりに対する戒めは、何もキリスト教の社会に限ったことではなく、イスラム教や仏教や儒教道徳の支配する社会においても、女性の発言権は全くといって

い程なかったし、今なおその風潮を色濃く残している地域は、キリスト教地域よりむしろこれらの地域の方ではないだろうか。要するに女性の地位の低かった時代には、女性の発言は認められるどころか、むしろ邪魔で、必要だったのである。

おしゃべりと並んでもう一つ嫌われるのは高慢さである。KHM 52「つぐみの髭の王様」のお姫さまは、美人だが気位が高く、高慢で、父王の選んだ相手がすべて気に入らず、求婚を断り続け、その上、相手に渾名までつけて擲ったりした。その傲慢な態度がメルヒェンでは手厳しく罰せられ、王女は乞食と結婚させられる。物売りになったり、婢になったりして、非常に苦勞して働かねばならなくなる。最後は、彼女が自分の高慢さを反省したので、つぐみの髭の王様と結婚できて、ハッピーエンドとなるのだが、そもそも彼女のとった態度は、高慢だと言って、それ程厳しく咎められるべきことなのであろうか。父親の捜してきた結婚相手に満足できず、皆断わり、その理由として全員の欠点を一つずつ挙げたというだけではないか。現代の我々の視点から見ると、自分の意思表示のはっきりした、自立した女性として、むしろ頼もしくさえ思える。しかし、昔の世界の生活を反映しているメルヒェンの中では、女性は親の捜してきたくれた相手に一切不満を持たず、素直に受け入れて、従順にその人と結婚するタイプでなければ幸せになれないのである。実際そのように受け身の女性がどうもヒロインとして幅をきかせているようである。

例えば、百年間眠っていた姫は、王子のキスで目を覚ますと、迷わずすぐにその王子を夫として受け入れているし、白雪姫は、ガラスの棺桶の中で死んだように眠りながら、王子が助けてくれるのを待っている。一方、王子の方も、寝ている少女を愛するということは、彼女の個性、知性、性格などが全く分からない状態の時に、ただ彼女の美しさのみ魅せられて求婚しているのである。¹⁷⁾ 救済者と結ばれるのがメルヒェンの特徴だとはいえ、お互いに、果たしてこのようなやり方が、伴侶を選ぶ方法として適切なものといえるのだろうか。男性は女性の外面的美しさのみ目を奪われているし、一方、女性は自ら働きかけることなく、ただひたすら相手が現れるのを待っているだけなのである。この極端な消極性と受動性は、しかしながら、時には、常軌を逸したレベルにまで達することがある。KHM 88「歌って跳ねる雲雀」では、父親が迂闊な約束をしたばかりに、末の娘をライオンの嫁にやらねばならなくなる。ヒロインの末の娘は、「お父様、お父様が約束されたことは守らなければなりません。私はまいります……」と言って、¹⁸⁾ ライオンとの結婚を承諾する。同時に、KHM 108「ハンス針鼠ぼうや」では、父王のした軽率な約束のため、針鼠のところに嫁がねばならなくなった一人娘は、「父親のためなら、そのものが来たら喜んで一緒に行くと父親に約束する。」¹⁹⁾ この徹底した従順さは、我々には理解し難いものである。結婚相手の選択は、本人自身によって為されるのではなく、両親によって為されるのが習わしであった時代では、女性はひたすら待ち、受け入れるという消極的な生き方でしか幸福を掴むことができなかったのである。しかも相手の男性は、王子であるということ以外は何も分からず、外観の描写すらない場合が多い。²⁰⁾ 主人公の女の子は可愛く美しいのに、王子はハンサムかどうかすら分からないのである。王子という地位と経済力を備えた男性との結婚なら、女性は幸せになるに決まっているということなのであろうか。背が高く、スマートでハンサムな男性との結婚を想像しているメルヒェンの読者には気の毒なのだが、本当に王子の外見についての描写は少ない。極端な場合には、相手は人間の姿ではなく、熊とかライオンとか針鼠とか蛙の姿、すなわち想像もつかないような嫌らしい姿で現れて来るのである。それでもヒロインの少女達は親の意を汲んで、従順にそれらのもとへと嫁いでいく。

VI

ただKHM 1「蛙の王様」だけは、少し趣が異なっている。ここでは王子は、醜い蛙の姿で王女の前に現れ、執拗に付きまとう。父王は、たとえ蛙のように醜いものにも約束を守り、愛情を持って接するようにと王女を諭す。王女もそうしようと努力するが、自分のベッドと一緒に寝たいという蛙の態度が余りにも厚顔無恥であるので、我慢できず、父親の命令に背いて蛙を壁に叩き付ける。すると、そのとたん蛙は美しい王子に変身する、という筋の展開の仕方をしている。一般にメルヒェンの主人公は、人が嫌がることでも自ら進んでやることによって、幸福な結末に到達する、というのが普通である。しかし、ここでは、王女は気持ちが悪いのを我慢して

蛙と一緒に寝るのではなく、怒りに任せて蛙を壁に叩き付けてしまうのである。すると、その一見残酷な行為が、逆に王女に幸せをもたらすことになるのである。この謎めいた結末について、レレケは次のように解釈している。親に従順で、何でも命令どおりに行動していた娘が、初めて自己主張をし、親に従属していた子供としての自分を殺し、本当の自分を自覚した大人としての自分を生み出したのであろう。親という色眼鏡を通して見ていた時には、蛙のように嫌らしい人に見えたが、先入観を取り外して自分自身の眼で見ると、王子のように美しい人であることが分かった。因襲的な態度や市民的モラルを捨てて、主体的に自分の行動を決定したこの王女は、自立した女性であり、このメルヒェンは女性の解放を目指した文学の一種であるともいえる、というのが彼の解釈ある。²¹⁾ 最近のアメリカの研究者がフェミニズムの立場から、グリムのメルヒェンの女性について、その消極性や受動性を厳しく批判しているのに、²²⁾ レレケのように解釈することによって、そんな女性ばかりではないと反論することができるし、彼の斬新で独創的な視点には心を動かされるものが多々ある。²³⁾ その上、確かにこのメルヒェンには、日本の昔話などにはつきものの忍従の教えを無視する要素が含まれていることは、否定できない。だが、果たしてこのメルヒェンは、レレケの解釈のとおり、女性の自立、主体性を賛美したものであろうか。当時のキリスト教社会と、ストイックなグリム兄弟自身の生き方を考え合わせると、常にメルヒェン全集の第一番を飾ってきたこのメルヒェンに、彼等は革新的な女性像を見たというより、むしろ、自分たちの理想とする女性像を見た、と考えるほうが自然ではないだろうか。即ち、この王女は、たとえ父親の命令であらうと、意に添わない相手、まして結婚もしていない相手と交渉を持つことを明確に拒否し、自分の純潔を守り通したのである。その彼女の堅い操が幸福な結末を勝ち取ったのである、というふうに解釈する方が時代を考慮に入れると的を射たもののように思われる。女性の貞操を非常に重視した、当時のヨーロッパのキリスト教社会では、この王女のようにどんな誘惑にも負けず、自分の操をしっかりと守り通せる女性は、人々の鑑であり、すばらしい幸福を得るのにふさわしい人だったにちがいない。親をも越える清純な心、純潔を守るためにとった毅然とした態度によって、彼女の強い貞操心が証明され、素晴らしい王子との結婚が実現するのである。

Ⅶ

ヨーロッパ中世のキリスト教社会では、性行為は罪深いものとされており、たとえ夫婦でも、交渉をもってはならないとされた日が随分多くあったそうである。贖罪規定書にその性的禁欲日の規定について詳しく記されている。それによると許可されている日は、結局、年に44日程だったそうである。²⁴⁾ 夫婦でさえ自由に交渉を持てなかった時代に、まして、未婚の娘が男性と交渉を持つなど言語道断、厳しく処罰されたそうである。²⁵⁾ そのような世の中で、好奇心の強い女性は、異性関係においても一人の夫で満足せず、好奇心に負けてタブーを犯すのではないかと考えられたのである。メルヒェンの中でも女性の好奇心は、男性の好奇心に比べて、遥かに厳しく罰せられている。KHM 46「フィッチャーの鳥」では、姉達は好奇心に負けて開けてはならない戸を開けてしまう。その結果、罰として男に殺されるし、KHM 3「マリアの子供」でも、主人公の女の子は部屋の中を覗きたいという好奇心を抑えることができず、禁を犯してしまう。その罰として、彼女は天国から追放され、言葉も奪われ、子供まで取り上げられる。更に、KHM 43「トルードおばさん」では、女の子は親から禁止されているのに、好奇心に任せてトルードさんの家に行き、結局、魔法で丸太ん棒にされて火にくべられてしまう。女性の好奇心がこれ程厳しく罰せられるのに対して、男性の好奇心に対しては随分寛大に取り扱われている。KHM 6「忠義なヨハネス」の若い王は、好奇心に負けて、開けてはならないと言われている部屋を開けて、タブーの絵姿を見てしまう。しかし、罰せられるどころか、逆にその絵姿の女性を捜そうと旅に出かけ、忠実な下臣ヨハネスに絶えず助けられながら絵姿の王女を見つけ出すことに成功する。好奇心に対する男女の扱い方の相違は、最初に誘惑に負けたのは男ではなく女である、としてイヴの犯した罪に女の原因を見ようとする中世以来のキリスト教的考え方が反映しているようである。²⁶⁾ 「つまりキリスト教においては、神が自分のイメージに合わせてつくったのが男であり、そして男の肋骨から作ったのが女だから、女は男に奉仕するために存在しているというふうに考えられていたのです。男より劣った女性は、性の誘惑にも溺れやすいので、結婚生活のなかでも配慮が必要であるとされているのです。」²⁷⁾と阿部は指摘している。要するに女性の好奇心は、単に見た

い知りたいという認識的な面を越えて、性的な面と強く結び付いたものとして理解されていたのである。好奇心の強い女性は誘惑に溺れやすく、貞操を守りにくいと考えられていたようだ。それ故、好奇心の強い女性は好奇心の強い男性に比べて、異常なほど厳しく罰せられるのである。メルヒェンのヒロイン達が幸せになるためには、この好奇心を無くすか、塔に閉じ込められるか、百年間眠らされるか、又は、罪を認めて悔い改め、懺悔するかしかほかに方法はなかったのである。

VIII

一方、男性が主人公の場合は、たいていは馬鹿で、のろまで、仕事も満足にできない上に、特に努力をするわけでもないという無能な男性が、魔法の力や救済者の力を借りて幸運を手に入れている。例えば、KHM 57「金の鳥」の王子は末っ子で、一番馬鹿でうすのろなのだが、助力者（狐）が現れ、幸運を掴む。しかも彼は、その狐の忠告を三度も無視して窮地に陥るが、狐は最後まで見放さず、助けてやる。この王子の唯一の長所は思いやりがあるということであろう。KHM 62「蜜蜂の女王」でも、主人公は三男の末っ子で、蟻、鴨、蜂を殺そうとする兄達をたしなめて、無益な殺生を止めさせ、これらの生き物の命を救ってやる。そのお礼に助力が与えられ、王女の出す難題を解くことができ、王女との結婚という幸運を手に入れる。KHM 63「三枚の鳥の羽」でも同様に、主人公は三番目の末の息子で、間抜けで、怠け者である。兄たちのように美しい絨緞を捜す旅に出ることもせず、ただぼんやり座っているだけである。そこに蟾蛙が現れて力を貸してくれる。その結果、彼が一番美しい絨緞を持って帰って来ることができ、幸運を掴む。要するに男の主人公の場合は、勤勉に働いて幸せを掴むというのではなく、生き物に対して人一倍深い思いやりの心を持っているかどうかということが、主人公をハッピーエンドに導く大切な要素となっているのである。

結局、グリムのメルヒェンの中では、男の主人公は馬鹿で、怠け者で、仕事もできず、努力もしないのに、ただ勇気と思いやりさえあれば、たとえ好奇心に負けてタブーを犯しても、助力者の力で幸運を獲得することができる。しかし一方、女の主人公の方は、好奇心を抑え、無口で、従順で、ただひたすら懸命に働き続けなければ、救済され、幸せな結婚を迎えることはできないのである。特に女性の好奇心は性的誘惑として理解され、これを抑えて、貞操を守り通せるということが、幸福な結末に到達する不可欠な条件となっている。従って、グリムのメルヒェンでは、残酷な表現に比べて、性的な表現は極端に書き換えられている。一緒に寝るなどという単刀直入な表現は、初版以後影を潜め（KHM 1「蜂の王様」²⁸⁾、未婚の女性の妊娠などという淫らな行為も（KHM 12「ラプンツェル」²⁹⁾、決定版では全く削られている。グリム自身が敬虔なキリスト教徒でもあったことや、彼等が当時、女性に縁のない禁欲的な生活を送っていたことなどに加えて、19世紀の都市市民階級という読者層の人々の道徳観に適合するよう配慮したことなどが、その書き換えの理由として考えられる。要するに、女性は、メルヒェンの中といえども、時代の道徳観に縛られ、家事労働や忍従の受け身な生活から解放されてはいないといえよう。

註

- 1) Weber-Kellermann, Ingeborg, Interethnische Gedanken beim Lesen der Grimmschen Märchen. In: Acta Ethnographica Academia Scientiarum Hungaricae, Tomus 19, Budapest, S. 432(1970).
- 2) グリムのメルヒェン集“Kinder- und Hausmärchen”は通常KHMと略され、その後には番号を添えて、何番目のメルヒェンであるか表示されるので、ここでもそれにならった。
- 3) Rölleke, Heinz, Die Frau in den Märchen der Brüder Grimm. In: Die Frau im Märchen. hrsg v. Früh, S. und Wehse, R., Kassel S. 79f(1985)
- 4) ebd., S. 80(1985).
- 5) Rölleke, H., Die “stockhessischen” Märchen der “alten Marie”. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift, Neue Folge, Band XXV, Heft 1. Heidelberg, S. 74-86(1975).

- 6) Beuys, Barbara, Familienleben in Deutschland. Darmstadt, S. 368(1980).
- 7) Grimm, Jacob und Wilhelm, Kinder- und Hausmärchen, hrsg. v. Rölleke, H., 3.Bd, Stuttgart, S. 332-334(1980).
- 8) Rölleke, H., Schneeweißchen und Rosenroth. In: Wo das Wünschen noch geholfen hat, Bonn, S. 192(1985).
- 9) Grimm, J. und W., Kinder- und Hausmärchen, München, S. 674f.(1973). KHM のテキスト(決定版)はこの本を使用。以後 KHM S.(ページ数)と略す。
- 10) ebd., S. 676(1973).
- 11) ebd., S. 676f.(1973).
- 12) Weber-Kellemann, I., Die deutsche Familie. Frankfurt a. M., S. 108(1974).
- 13) Rölleke, H., Die Älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Cologny-Genève, S. 246(1975).
- 14) ebd., S. 251(1975). KHM S. 301(1973).
- 15) 沈黙に関しては次の本を参照。Bottigheimer, Ruth B., Grimms' bad girls and bold boys. Yale University, pp. 51-56(1987)。(邦訳)ポティクハイマー, R.B.(鈴木晶・田中京子・広川郁子・横山絹子訳)『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』紀伊國屋書店, pp. 99-107(1990)。
- 16) ibid., p. 78(1987)。〔邦訳 p. 141(1990)〕
- 17) Solms, Wilhelm, Der Märchenprinz. In: Das selbstverständliche Wunder, Marburg, S. 53(1986).
- 18) KHM S. 439(1973).
- 19) KHM S. 531(1973).
- 20) Solms, W., (wie Anm. 17), S. 46(1986).
- 21) Rölleke, H., (wie Anm. 3), S. 86f.(1985).
- 22) 前掲15), および Tatar, Maria, The hard facts of the Grimms' fairy tales. Princeton University 1987。(邦訳)タタール, M.(鈴木晶・高野真知子・山根玲子・吉岡千恵子訳)『グリム童話 その隠されたメッセージ』新曜社, (1990)。
- 23) 拙論「グリムの『かえるの王様』について」武庫川女子大学紀要英米文学科編第34集 pp. 85-91(1986)。ここでは、筆者は Rölleke の解釈を支持する立場で論理を展開している。
- 24) 阿部謹也『西洋中世の男と女』筑摩書房, pp. 158-162(1991)。
- 25) 同上, pp. 99-102(1991)。
- 26) 同上, pp. 184-185(1991)。
- 27) 同上, pp. 184-185(1991)。
- 28) Grimm, J. und W., Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm—Vollständige Ausgabe in der Urfassung—. hrsg. v. Panzer, Friedrich, Wiesbaden, S. 65(1953), KHM S. 42(1973)。
- 29) ebd., S. 85(1953), KHM S. 106(1973)。